

真実と表現

—レトリックとコミュニケーションを中心にして—

● 村 越 行 雄

真実の探求と言語による表現は、どのような関係にあるのであろうか。緊密な関係があるにもかかわらず、その整合性は必ずしも明確とは言えない。果たして、両立できるのか、できないのか。

古代ギリシャ時代に、非両立性の極端な例を見出すことができる。それは、プラトンが極端な形で主張した哲学とレトリックの関係である。プラトンにとって、哲学は正に真実の探究にあり、それとは反対に、レトリックは、真実とは関係のない、白を黒と言ひ、黒を白と言う言語表現の技でしかないものである。そして、悲劇は、その後も長く続き、現在に至っても継続しているということである。

しかし、最近では、コミュニケーションとの関係で、レトリック、特に古典レトリックがよく引き合いに出されることがある。勿論、哲学においても、最近ではコミュニケーションに関する理論は数多く出されている。

では、真実と表現は、どのような関係で、どのような位置づけができるのであろうか。

(1) 古代ギリシャ時代の真実と表現

紀元前5・6世紀の古代ギリシャ時代は、都市国家アテネなどを中心に、直接民主制の下で、文化的に発展した社会を形成していた頃である。市民は多数の人の前で口頭によって自ら主張するという弁論によって、自らの運命を切り開いていった。成功した人生を送れるかどうかは、言

語表現の技である弁論の術によって決定されるほどのものであった。そこで、活躍したのが、ソフィストと言われる人たちであった。彼らは、授業料を受け取るという形で、つまり有料で弁論術を教えていった。彼らの中でも、プロタゴラス、ゴルギアスなどは、名の知れたソフィストとして多くの人に知られている。彼らの積極的な活躍によって、レトリックは量的にも、質的にも発展していった。

ソフィストとは必ずしも同一視できない、一線を引いたところにいるのが、イソクラテスである。教養の重要構成要素としてレトリックを位置づけ、学校を創設してレトリックの教育を実践していった。それは、上記のレトリックの流れとは異なる、もう1つのレトリックの流れと言えよう。

それに対して、ソクラテスの活躍の後、その弟子のプラトン、更にはその弟子のアリストテレスという、現在まで続く哲学の本流の土台が形作られた。特に、プラトンなどによるソフィストへの非難・攻撃は激しいものがあり、それがその後のソフィスト評価を決定付けてしまったと言えるものであった。例えば、西洋哲学史に関する著書を見ると、ソフィストの扱いが皆無であったり、記述があっても、極めて少なかったり、否定的な評価しか書かれていなかったり、不当な扱いを受けていると言わざるを得ないのである。また、辞書などで調べると、現在でも「ソフィスト」に「詭弁家」という訳語が付けられており、ソフィストの悪評が今でも消えていないことが分かるであろう。

上記の簡単な記述からでも明らかなように、哲学対レトリックが真実探求対言語表現という構図で捉えられていることが見えてくる。真実と表現は、相容れない、両立できないものとして関係付けられているのである。そこには、哲学とレトリックの定義はどうなるのか、両者の線引きはどこに置くべきなのか、という問題が浮かび上がってくる。それとの関係で、真実は何か、表現は何か、真実は言語で表現できないのか、言語で表現できるのは非真実しかないのか、その他の様々な問題が現れ

てくる。

(2) 古代ギリシャ社会における哲学とレトリック

哲学者プラトンにとって、真実を探求するには、我々人間が日々生きている現実世界という個別的で、多様的で、可変的なものを対象にする限り、目標に到達することはできず、あるいは目標そのものが見えなくなってしまうのである。むしろ、それから離れたところで、それを超越したところで、真実は探求できると考えられている。

ところが、古代ギリシャ時代から古代ローマ時代までの古典レトリックは、説得性をその主要な特徴としているものである。つまり、他者を説得するために必要な言語表現の技なのである（古典レトリックの弁論術は、発想、配置、修辞、記憶、発表の5部門から成り立っており、厳密には、修辞が言語表現の技であるが、本稿では、広く解釈して、弁論術全体を示すものとして言語表現の技を使用する）。それは、正に我々人間が日々生きている現実世界の中のことであり、その中での人間同士の説得を対象にしているのである。

結局、哲学における真実探求は、現実世界では不可能な、現実世界を超越したところにしか可能でないものとなる。それに反して、レトリックにおける説得性は、現実世界の真っ只中、その中でのみに可能で、しかも日常的な個々人の人間関係の中でのみ可能となるものである。その意味から言えば、両者は相容れない、両立できないものになってしまう。

そのことから、レトリックによって言語表現の技を習得することは、自らの現実の生活を保ち、向上させていくことにつながるもので、非常に現実的で、実務的で、効率的な処世術であることが理解できる。言い換えれば、世の中を巧く、上手に、ずるく生きていく技と言えよう。それとは逆に、哲学によって真実がたとえ探求できたとしても、それで現実の生活が良くなったり、幸せになったり、少なくとも経済的に、物質的にできるわけではないのである。一般的に信じられている哲学者のイ

メージのように、お金や出世や、その経済的、物質的豊かさとは無縁な生活となるであろう。

では、古代ギリシャ社会の市民にとって、どちらが好まれるであろうか。勿論、レトリックである。事実、多くのソフィストがあれ程活躍できたのは、多くの市民によって支持されたからである。もし古代ギリシャ社会を勝手に想像すると、ソクラテスを始めとする哲学者とそれに教えを請う人々の姿、それとは対照的に、華やかなソフィストたちと多数の聴衆でにぎわう集団の姿が目に見えてくるようである。それに、無料で授業を提供していた哲学者に対して、ソフィストは有料で授業をしており、かなり経済的に恵まれていたので、両者の対照的な姿はより顕著なものであったろう。

しかし、以上のような説明では、むしろプラトンのようなソフィスト評価の方が妥当であるように思われてしまうかもしれない。ただ、それには、真実が現実世界を超越したところ、現実世界を否定したところにあるという前提があるのであって、もしその前提が疑われたり、否定されたりすれば、状況は変わってくる。つまり、真実は現実世界の中にしか存在せず、それ以外は不可能であるとするれば、レトリックの扱う対象領域は、哲学が扱わなければならない対象領域になり、言語表現の技も哲学の主要なテーマの1つ（勿論、たとえ現実世界の中のみで真実の存在を認めたとしても、哲学の扱う主要テーマは数多くある）になり、そのことが最終的には真実と表現の両立性へと結びつくことになるであろう。

（3）レトリックへの古典的評価の変化

ソフィストが活躍し、発展させたレトリックは、現実世界の間人間関係を重要視する現実主義的、人間主義的な特徴を際立たせたものであった。しかし、そうした特徴は、古代ギリシャ社会では良い評価を受けず、むしろそれを超えたところに価値を見出し、理想主義的、観念主義的な特徴を前面に出していたと言える。それは、我々人間が五感で捕らえる現

実世界や生身の人間に対する懐疑的あるいは否定的な態度の表れであった。当時の古代ギリシャ社会の実際の市民はともかく、少なくともプラトンなどの哲学者はそう考えていたし、その考え方は途絶えることなく、その後も長く引き継がれていった。例えば、キリスト教を始めとする宗教的な世界では、現実世界や人間世界は神の下に位置づけられ、絶えず否定的な意義しか認められなかったのであり、そうした傾向は中世、近代へと引き継がれていった。また、そのような二元論的世界観は、宗教的な領域だけでなく、様々な領域でも見られる傾向でもあった。

二元論的世界観を取るか、一元論的世界観を取るか、更には折衷論・変形論・発展論を展開するか、いずれにするかの議論は様々な形で可能であるが、少なくとも20世紀に入ってから、我々人間が今現在生活している現実世界が最も重要な対象（あらゆる意味での対象）であることが認識され、実証されてきたことは、事実であろう。つまり、唯一絶対の対象までは行かなくとも、少なくとも最も重要な対象であることは確実であろう。

現実世界を重要視する傾向は、現代の主要な特徴であると言える。それは、哲学の領域でも同様である。例えば、哲学、特に言語哲学におけるオースティン、ウィトゲンスタインなどを中心とする日常言語学派が良い例であろう。彼らは、我々が日常的に使用している自然言語こそが、唯一重要な研究対象になりうるもので、それ以外はないとし、それまでの日常言語（自然言語）を否定して、理想言語を研究する哲学者を批判していった。また、その影響を受けて、実際の言語使用を理論化した語用論という、言語学の領域で統語論、意味論と並ぶ、言語研究の3部門の一つが誕生した。

言語哲学（特に、日常言語学派など）と語用論は、現実世界を対象にし、そこでの言語使用を研究しており、言い換えれば、人間同士の言語コミュニケーション（本稿では、言語コミュニケーションを、言語を媒介にするだけでなく、その際に使われる非言語的手段による媒介も含む

ものとして、つまり言語・非言語コミュニケーションとして使用する)を対象にしている。そのことは、言語コミュニケーション、あるいはコミュニケーションを重要視する傾向が現代の主要な特徴であるということにつながっている。

現実世界・コミュニケーションを特徴とする現代において、レトリックもその傾向を表している。レトリックは、古典レトリックから中世へ、近代へと時代の変化の中で、表舞台から姿を消し、詩や小説のような芸術的世界という特定の限定的な領域の中で継続されていくに過ぎなくなってしまった。そして、20世紀に入ってから復活された現代レトリックは、比喩論を特徴とするものになった。それは、弁論術→修辞学→比喩論という対象領域の縮小過程を経て来たものである。しかし、そのような現代レトリックと並んで、古典レトリックも注目を浴びて、盛んに利用されているのが現実である。

現実世界・コミュニケーションという特徴から見ると、現代レトリックも古典レトリックも関係している。しかし、関係の仕方に相違が存在している。比喩論は、隠喩、換喩、提喩などの例からも明らかなように、言葉そのものの表現に関わるもので、コミュニケーションの一部であって、全体に関わるものではなく、言語表現の技(狭義)である。それに対して、弁論術は、発想、配置、修辞、記憶、発表の5部門から成り(比喩は修辞の中の一部にすぎない)、相手を説得する為に、言語的手段だけでなく、非言語的手段も含めて、全てを使用してコミュニケーションをする訳で、コミュニケーション全体に関わるもので、その意味での言語表現の技(広義)のこととなる。従って、コミュニケーションの研究の際によく利用されるのは、現代レトリックよりは古典レトリックということになるのである。勿論、比喩論もその一部としては当然利用されるのであるが。

以上のように、言語哲学、語用論、レトリック(特に、古典レトリック)は、現実世界・コミュニケーション研究の重要な研究領域となって

いるのである。ただ、古典レトリックの中の非言語的手段によるコミュニケーションに関しては、特にアメリカなどが中心になって研究が盛んに行われている非言語コミュニケーション論として、独立した研究領域が存在している。それを加えれば、言語哲学、語用論、レトリック、非言語コミュニケーション論が、現実世界・コミュニケーション研究の重要な研究領域ということになる。

(4) コミュニケーションにおける真実と表現

真実が語りかける言葉でもなく、神が語りかける言葉でもなく、正に人間が人間に語りかける言葉こそが重要な関心事であり、そこにこそ真の人間同士のコミュニケーションが成立するのである。また、そこにこそ我々人間にとっての真実が存在すると言えるのである。従って、現実世界を超越したところにある別の世界に位置する真実については、懐疑的にならざるを得ないし、仮に存在するにしても、我々人間にとって、何の意味があるのであろうか。

そのように考えると、「真実」と言っても、二つの異なるものが存在することになる。それらは、プラトンが考える真実とソフィストが考える真実というように区別することも出来よう。もしそうならば、真実とは無関係な、単なる言語表現の技に過ぎないとするレトリックへのプラトン批判は、見当違いであると言うことができることになる。というのは、レトリックにおいても、真実の探求は可能であるし、またその言語表現も可能であると言えるからである。ただし、レトリックを悪用して、真実とは関係のない言語表現の技の習得と使用は可能であるし、現実によく起きることである。つまり、プラトンの絶対的真実とは異なり、ソフィスト的な、人間主義的で、現実主義的な真実は相対的で、様々な限界が存在するのである。

では、相対的真実と表現は、どうなるのであろうか。言い換えれば、日常的に行っている人間同士のコミュニケーションにおいて、真実と表

現は、どう関係しているのでしょうか。

我々が住んでいる経験世界では、真実はいくまでも経験に基づいて明らかにされるものとなる。それは、科学的に、客観的に実証されるものでなければならない。実証できないものは、真実であると確定できないことになる。従って、超自然的なものは、経験世界を超越しているために、科学的に、客観的に実証できず、真実であることを確定できない。逆に言えば、超自然的なものの完全否定も、科学的に、客観的に実証することはできないことになる。結局、超自然的なものは、経験世界を超越しているがゆえに、肯定も否定もできないのである。そして、同様のことは、プラトンの真実、宗教的な真実にも言えることである。

経験に基づく相対的な真実は、科学的・客観的な実証を必要とするが、将来のある時点で、ある新事実が発見され、真実が変更されることがあったり、また全体の一部しか見えず、その部分の真実は、それ自体では真実かもしれないが、全体には適用できないことがあったり、様々な制約や限界を有している。それは、良い意味でも、悪い意味でも、現実世界の反映と言えるものである。

そうした真実を人間が誰かに伝えるために、言語による表現を行い、コミュニケーションを行うことになる。そこで、コミュニケーションにおいて、真実と表現の関係をまず内容と表現の関係に置き換えて、考えることにする。

ある人が別の人にコミュニケーションを行う場合、ある内容のある言語表現を使用して相手に伝えることになる。しかし、その内容は、いつも必ず真実だけであるとは限らない。真実と確認できなくても、多分そうであろうと思って伝えたり（思い違い）、真実であると信じて伝えたり（信念）、全く分からず伝えたり（未知）、勘違いや取り違いで伝えたり（間違い）、真実でないことを知っていて伝えたり（嘘、騙し）、様々なケースが考えられる。更に、単なる社交辞令の挨拶のように、人間関係を保つ意味で、全く内容のないことを言うことがある。

言語表現に関しては、同一の内容を伝えるにしても、複数の(時には、無限の)言語表現が可能であり、伝達相手の人、場所・時間、状況、その他の諸条件によって、言語表現を変えていき、それぞれ異なる効果をもたらすことになる。そして、内容が異なれば、言語表現の可能性は更に増加する。言語表現の可能性は、無限であると言われるように、数多くの要因が複雑に絡み合っており、それだけに各個人がどのような場面で、どのような言語表現をすべきかを決めるのは困難で、その意味から言っても、言語表現の技の習得の必要性が理解できよう。

以上のように、内容と表現は、必ずしも正比例した関係にあるのではなく、互いに独立した別物で、両者をどのように関係させていくかは、コミュニケーションを行う個人であって、その個人は何が良いかをその都度考え、判断し、実行していくことになる。つまり、個人は、伝達内容を選択し、その内容と話をする場面などを考慮して、その上で言語表現を具体的に決めていくことになる。勿論、瞬時に行われるが。

そして、真実と表現の関係は、内容と表現の関係の一部となる。伝達内容が真実なのか、真実でないのか。では、内容と真実は、どのような関わりを持っているのであろうか。

(5) コミュニケーションにおける内容と真実と表現

コミュニケーションにおいて、個人は、伝達する内容と言語表現による伝達の仕方を会話の場面に適合した形で組み合わせるということになり、その結果に対して全責任を負うことになるのである。コミュニケーションが成功するか、不成功か、失敗か、いずれの結果に対しても、個人は責任を負わなければならない、しかも人生の幸・不幸に影響を及ぼす程の責任重大なことなのである。そして、コミュニケーションを成功させ、人生の幸を手に入れるためには、いかに内容の良いものにするかを考え、更にいかに適切な言語表現を使用するかを決める必要が出てくる。そこでは、内容が言語表現に優先することはないというのが現実である。

例えば、内容が良ければ、言語表現が悪くても、コミュニケーションは成功するとか、内容が悪ければ、言語表現が良くても、コミュニケーションは不成功・失敗するということは、現実的ではないでしょう。逆に、内容が悪くても、言語表現が良ければ、コミュニケーションは成功するのが現実でしょう。従って、内容に関係なく、言語表現の技を習得し、実践していくことが極めて重要になってくるのである。コミュニケーションにおいてレトリックが必要になるのは、正にそこにあるのである。レトリックを習得しておけば、内容が良くても、悪くても、コミュニケーションを成功させていく方法が明確になってくるからである。

言語表現を内容から区別して考える必要があると言ったが、内容はどうでもいいというわけでない。勿論、真実でないことを知っていながら、嘘の内容をレトリックを駆使して、相手に信じ込ませてしまうことは、否定されるべきである。もしそう考えていくと、コミュニケーションを成功させ、人間関係を維持・発展させるためには、内容＝真実ということになろう。しかし、厳密に受け取って、客観的に実証された真実だけしか言えないとしたら、日常会話は不可能になってしまう。むしろ、緩やかに解釈して、客観的に実証済みの真実だけでなく、前述のように、思い違い、信念、未知、間違いなど、真実らしく思えるものまで拡大する必要があり、更には内容のないものまでも拡大する必要があるでしょう。つまり、嘘、騙しのようなケースを取り除くこと、レトリックの悪用を排除することが主眼となる。ただし、レトリックは、伝達内容とは関係なく、習得できるものであり、またそうすべきものであると言えます。それだけに、悪用を恐れて、レトリックの習得を批判的に見るのではなく、悪用をも含めて、レトリックの意義を理解して、習得していくべきものなのである。

現在、コミュニケーションの重要性が、頻繁に叫ばれていながら、レトリックの必要性はそれに比例しているとは言えないでしょう。その理由の一つは、やはりレトリックに対する不信感でしょう。口先ばかりで、

信用できないというのが一般的な感情です。それには、黙っていても、理解できるという日本的な伝統があり、言語による表現そのものに対する不信感があるからかもしれません。言い換えれば、プラトンによるソフィスト批判、それに日本的な言語不信感が、レトリックに対する信頼感を抑えているのかもしれませんが。その理由はともかくとして、コミュニケーション成功の鍵はレトリック(より正確には、言語哲学、語用論、レトリック、非言語コミュニケーション論)にあり、その技術の習得と実践は必要不可欠であると言えます。

最後に、現在の世界は、国を超えた、地球規模の人的交流が活発化し、加えてインターネットなどによる交流が激増し、コミュニケーションの意義はますます多岐にわたり、しかも複雑化しており、それだけにそれに対応するためにも、レトリックの技術的發展が必要になってきていると思われる。それは、今まで述べてきた古典レトリックや現代レトリックだけでなく、それらを乗り越えるレトリックの展開のことである。